

即如門主御親修法要

蓮如上人五百回 遠忌法要

函館別院開基百四十五周年記念法要

崇敬寺院門信徒物故者 追悼法要



本願寺函館別院

蓮如上人



(御影は山科八幅の内)

上人略年譜

年号	国際歴	年齢	主要事項
応永22	1415		ご誕生(2月25日・新暦4月13日)
永亨 3	1431	17	お得度
長禄 元	1457	43	父存如上人(第7代)ご往生 本願寺第八代をご継職
長禄 2	1458	44	実如上人(第九代)ご誕生
寛正 元	1460	46	「正信偈大意」を著される
寛正 2	1461	47	初めて「御文章」を書かれる 宗祖親鸞聖人200回忌
寛正 6	1465	51	延暦寺の衆徒、大谷本願寺を破却 大谷の地をご退去、近江へ向かわれる
文明 3	1471	57	越前吉崎に坊舎を建てられる
文明 5	1473	59	「正信偈和讃」を刊行される
文明 7	1475	61	越前吉崎をご退去、若狭小浜、 丹波・摂津を経て河内出口に到着される
文明 9	1477	63	「御俗姓」を書かれる
文明10	1478	64	山城山科に至り坊舎の造営を始められる
文明12	1480	66	山科本願寺御影堂上棟
文明13	1481	67	山科本願寺阿弥陀堂上棟
延徳 元	1489	75	寺務を実如上人に譲られる
明応 5	1496	82	大坂石山に御坊を建立
明応 8	1499	85	ご往生(3月25日新暦5月14日)

御挨拶



函館別院
輪番

鷲山諦住

当院開基百四十五年を迎えます今年、蓮如上人五百回遠忌法要、崇敬寺院、門信徒物故者追悼法要を修行致しますに当り、即如御門主には遠路御親修を賜ります事、誠に有難き極みであります。扱、振り返りますと当地着任以前は関東、中京、関西と生活して参りましたが、しかし現実の北海道の極寒は三冬を越して肌身を通じて、つくづくその厳しさを実感致して居ります。

今日に於ては随処に暖房設備も、充実に参つて居りますが、その昔は、この寒風にあつての開拓は困難の限りを、つくされた事と拝察されます。分けてもがな、故郷を離れて開拓に熱き思いに燃える人々は、共に支え助け合いながらこの大地にたつて念仏の声たからかに法田をつちかわれてゆかれたことと思ひます。かかる思いを駆せる時、函館別院の百四十五年の歴史は正に先人達の涙と汗との土壌になり立つものと、味わう事であります。

今ここに蓮如上人の歩まれた困難と、み法に遇う慶びとの御生涯を偲び、慕う時、あらためて先人達の日進月歩の辛苦を耐えぬいた根源は、お念仏という基盤によつて打ち克つ事が出来たのでなからうか、いや、必ずそうであると確信するものであります。

ごあいさつ



函館別院
総代

松本 演之

このたび蓮如上人500回遠忌、本願寺函館別院開基145年御親修法要と併せ崇敬寺院門信徒物故者追悼法要が、即如ご門主様をお迎えし茲に厳修されますことは誠に有り難く慶び一杯であります。浄土真宗中興の祖であります蓮如上人の御遺訓をこの身に体して21世紀の黎明を迎えることが出来ましたことは正に感無量であります。

函館別院の歴史は北海道発展の歴史でもあります。安政6年(1859年)函館は横浜、長崎と共に日本最初の貿易港として開港され、時同じく、安政4年(1857年)5月10日に第20代宗主広如上人は寺院建立の公許を得るために、幾たびかの交渉の末、寺社奉行より箱館地蔵町官庫のほとり1万坪を許可されました。そして、その地に但馬、加賀、能登、越前より門信徒370人余りが移住して開拓に従事され、今日の発展の礎となりました。又別院歴史の中で、崇敬寺院門信徒皆々様の限りなき御支援をうけ今日の隆盛を見ることができました。私達門信徒は尚一層、函館別院を聞法の中心道場として、念仏の声を子や孫にこのみ教えを伝えて参りたく決意するものであります。

御祝辞



講師
清岡隆文

(中央仏教学院講師)

このたび即如ご門主ご親修のもとに、蓮如上人五百回遠忌法要、本願寺函館別院開基145年法要、ならびに崇敬寺院門信徒物故者追悼法要が皆様のおこころがひとつになって、このように盛大にお勤めされますことに、深く感動しています。『ご本典』に「前に生まれんものは後を導き、後に生まれんひとは前を訪へ」としめされていますが、多難な人生において、お念仏をたしかかさえとして、ともに励ましあって力強く生き抜かれた先人たちのご苦勞があればこそ、このたびの尊いご法縁がひらかれていることと存じます。現在、わたくしたちは科学技術の恩恵を受けながらも、不安はかえって大きくなってきています。混迷の時代であればこそ、阿弥陀如来のご本願を聞かせて頂きましょう。このご法要を通して、それぞれの家庭においてお念仏の相続が、新たな決意のもとにすすめられることを願っています。

正信念仏偈解説

「親鸞聖人のあらわされた「教信信證」は浄土真宗の根本聖教であり、「正信念仏偈」はその行巻の中にあつて、「教信信證」の精髓を要約したものであるから、これこそ浄土真宗の教えの大綱を要約した大切な偈文である。

正信念仏偈

不 断 難 思 無 称 光
 清 淨 歡 喜 智 慧 光
 無 碍 無 對 光 炎 王
 普 放 無 量 無 邊 光
 重 誓 名 聲 聞 十 方
 五 劫 思 惟 之 掇 受
 超 発 希 有 大 弘 誓
 建 立 無 上 殊 勝 願
 国 土 人 天 之 善 惡
 都 見 諸 仏 淨 土 因
 在 世 自 在 王 仏 所
 法 藏 菩 薩 因 位 時
 南 無 不 可 思 議 光
 歸 命 無 量 壽 如 來
 正 信 念 仏 偈
 超 日 月 光 照 塵 刹
 一 切 群 生 無 光 照
 本 願 名 号 正 定 業
 至 心 信 樂 眼 為 因
 成 等 覺 證 大 涅 槃
 必 至 滅 度 願 成 就
 如 來 所 以 興 出 世
 唯 說 彌 陀 本 願 海
 五 濁 惡 時 群 生 海
 心 願 一 念 喜 愛 心
 能 発 一 念 喜 愛 心
 不 断 煩 惱 得 涅 槃
 凡 聖 逆 謗 齊 迴 入
 如 衆 水 入 海 一 味
 攝 取 心 光 常 照 護
 難 中 之 難 無 過 斯
 信 樂 受 持 甚 以 難
 邪 見 憍 慢 惡 衆 生
 彌 陀 仏 本 願 念 仏
 是 人 名 分 大 勝 利 華
 仏 言 廣 大 勝 解 者
 聞 信 如 來 弘 誓 願
 一 切 善 惡 凡 夫 人
 即 橫 超 截 五 惡 趣
 獲 信 見 敬 大 慶 喜
 雲 霧 之 下 明 無 闇
 譬 如 日 光 覆 雲 霧
 常 覆 真 実 信 心 天
 貧 愛 瞋 憎 之 雲 霧
 已 能 破 之 無 明 闇
 印 度 西 天 之 論 家
 中 夏 日 域 之 高 僧
 顕 大 聖 興 世 正 意
 明 如 來 本 誓 応 機
 釋 迦 如 來 楞 伽 山
 為 衆 告 命 南 天 竺
 龍 樹 大 士 出 於 世
 悉 能 摧 破 有 無 見
 宣 說 大 乘 無 上 法
 證 歡 喜 地 生 安 樂
 顕 示 難 行 陸 路 苦
 信 樂 易 行 水 道 樂
 憶 念 彌 陀 仏 本 願
 自 然 即 時 入 必 定
 唯 能 常 稱 如 來 号

常 本 入 遊 即 得 必 歸 為 広 光 依 歸 天 応
向 師 生 煩 證 至 獲 入 度 由 闡 修 命 親 報
鸞 曇 死 惱 真 蓮 入 巧 群 本 横 多 無 菩 大
処 鸞 菌 林 如 華 大 徳 生 願 超 羅 導 薩 悲
菩 梁 示 現 法 蔵 会 大 彰 力 大 顕 光 造 弘
薩 天 応 神 性 世 衆 宝 一 廻 誓 真 如 論 誓
礼 子 化 通 身 界 数 海 心 向 願 実 来 説 恩

三 円 萬 唯 道 諸 必 證 惑 正 往 報 天 梵 三
不 満 善 明 綽 有 至 知 染 定 還 土 親 燒 蔵
三 徳 自 浄 決 衆 無 生 凡 之 廻 因 菩 仙 流
信 号 力 土 聖 生 量 死 夫 因 向 果 薩 経 支
誨 観 貶 可 道 皆 光 即 信 唯 由 顕 論 帰 授
慇 専 勤 通 難 普 明 涅 心 信 他 誓 註 楽 浄
懃 称 修 入 證 化 土 槃 発 心 力 願 解 邦 教

報 専 偏 源 即 与 慶 行 開 光 矜 善 至 一 像
化 雑 帰 信 證 韋 喜 者 入 明 哀 導 安 生 末
二 執 安 広 法 提 一 正 本 名 定 独 養 造 法
土 心 養 開 性 等 念 受 願 号 散 明 界 悪 滅
正 判 勧 一 之 獲 相 金 大 顕 与 仏 證 値 同
辨 浅 一 代 常 三 応 剛 智 因 逆 正 明 弘 悲
立 深 切 教 楽 忍 後 心 海 縁 悪 意 果 誓 引

唯 道 極 弘 必 速 決 還 選 真 憐 本 大 煩 我 極
可 俗 濟 経 以 入 以 来 択 宗 愍 師 悲 悩 亦 拾
信 時 無 大 信 寂 疑 生 本 教 善 源 無 障 在 悪
斯 衆 辺 士 心 静 情 死 願 證 善 悪 空 倦 眼 彼 人
高 共 極 宗 為 無 為 輪 弘 興 凡 明 常 雖 撮 唯
僧 同 濁 師 能 為 所 転 悪 片 夫 仏 照 不 取 称
説 心 悪 等 入 楽 止 家 世 州 人 教 我 見 中 仏

函館開教百四十五年の歩み

本願寺の北海道開教ならびに本願寺派函館別院開創の沿革を尋ねるに、本願寺第二十世広如上人の世代で、安政四年（一八五七年）のことであるから、今から遠く百四十四年の昔にさかのぼるわけである。当時をしのぶ文献の徴すべきものもなく、二三の簡単な伝承をされてきた記述あるのみなので、その詳細を記すことはできないが、当時蝦夷地と云って、北辺海防のために閉ざされた北海道の開教についての先覚の、なみなみならぬ苦勞の一端をしのび、今日ここに蓮如上人五百回遠忌法要の盛儀をお迎えするに当たって、さらに広大無辺の大悲を讃仰し、同信の報謝の懇念の助縁としたい。後に正確な記録の作られる手がかりともなれば幸いである。

一、函館開教の公許

函館別院の開創は北海道における本願寺派開教の源泉をなすものであるが、もちろん開教は簡単にできたわけではなく、当事者の苦心は今日考えも及ばぬものがあった。まず当時の情勢をみると、時恰も幕末の多事多難な時代で、特に北方外国との接触しげく、蝦夷地は幕府が直轄し、東北の諸藩に命じて兵を駐留させて防備を固めた。世は寛政の別院開趾の六七十年前のこと、此の地の交易に高田屋嘉兵衛、金兵衛兄弟の活躍した当時である。その後二

十年ぐらいで直轄解除となって駐留兵は引き揚げたが、安政二年再び幕府は諸藩の駐兵を命じ、取締りは厳重を極めた。本願寺の北海道開教活動は、こうした物情騒然たる情勢下に行われたのである。

当時本願寺では情勢を重視し、英邁な広如上人を中心に、人心の安定と辺地の開発のために、大いに北辺の布教を企画しつつあった。青年僧侶の間にも奥州、北陸の商船の往来に刺戟されて、北地開教の雄志を抱いて奔走する者も少なくなかった。その代表的な一人に函館

と一葦帯水の位置にある青森県下北郡川内願乗寺の堀川乗経師がある。乗経師は初めに法恵と云ったが後に乗経と改めた。乗経師は願乗寺五代目証道師の二男で、長兄は秀道と云った。八才のとき父を失い、天保十二年十七才のころ郷里を出て、海峡を隔てた念願の函館に渡った。しばしば小樽方面はじめ新天地の彼方此方を遍歴して北地の開教を決意し、そのため寺院建立の必要を痛感するに至り、安政二年のころ江戸に赴いて当時本願寺の北方開教の推進本部だった築地本願寺に到って見聞するとこ

ろを報告し、意見書を提出して北海道開教の緊要なることを説いたのである。広如上人は大いにこの献策を用いて乗経師を願乗寺住職に任じ、北辺開教のため寺院の進出を計られた。上人はこの後も乗経師の申し出については援助を惜しまず、乗経師もつねに上人の指揮を仰ぎ、その一生の活動も上人の恩遇に答えるものだった。

当時北海道は既存の寺の外は新寺の建立を許さず、本山別院の設立などはい思ひもよらなかつた時代で、何れの宗派も既存の寺号を用い、その寺の掛所として新たな土地への進出を計る外はなかつた。函館をはじめ小樽、江差、札幌等も別院の公称を公許されるまでは、許可寺院の掛所として布教を行う外に方法はなかつた。かくては広如上人は寺院建立の公許を得るために、たびたび執事職をして交渉せしめ、遂に寺社奉公より函館布教の公許を得たのが安政四年である。一説に安政四年五月二十四日と云う。

二、大虫師の教導

待望の寺社奉行の公許を得て、本山

は直ちに兵庫県但馬国出石群平田専福寺の入真房大虫師を函館に派し、初めて本願寺の道場を設け、大悲伝普化の活動を開始させたのである。

大虫師は居ること二年余にして病に倒れ安政六年六月十八歿したので、本山ではその後任に堀川乗経師を任命した。さきに開教公許とともに大虫師の函館派遣を考えるに、別院所蔵の過去帳に、大虫師の肩書きを「御使僧」を記し、また専福寺隠居とある点よりみて、相当の年配の先輩であることが知られ、乗経師は草創当時は函館を拠点として専ら外に在つて周辺の開教を計り、公許の翌年には上磯方面の入植を企て、また札幌、小樽方面の開教を志して席暖まるひまもない状況で、函館掛所は大虫師が本山派遣の師僧として、内に在つて専ら門徒の教導につとめ、開教一すじに二者一体の間柄であつたと思うのである。

三、坊舎創建の御消息

函館開教公許とともに乗経師らの奔走で、地蔵町官庫の傍に寺地二万坪をもとめ、翌安政五年に二字の坊舎が建てら

れた。この喜びを広如上人は、四年後の文久元年に認められた「箱館坊舎創建の御消息」の中で、左の通り仰せられている。

「往昔高祖聖人はあまたとせ北陸東関の險阻を経回し、辺鄙の郡類を化益せられしを、ふかく喜ばせたまひけるをよそにみて、此まま打捨て置かんは予が職掌にとつて本意なきことの限りに候。せめては坊舎を創建し、宗意を引通せしめばやと年ごろの企願一かたならざれど、いかにせん時世の習にさへられて、甲斐なくもそこばくの星霜を送りけるに、やうやうに時至り、去る午年安政五年経営を始め、留住の門葉あつまり、日ならずして土木の功を了へ、加之、初会の法筵よりして老若男女雲集せしめ、日に日に専ら法義弘宣の趣き伝え聞いて、子が一身の満足、歓びの中の歓び何事か是にしかん。」

函館は北陸門徒の移住者の多い土地ながら、真宗寺院の設立が許されなかつたが、漸くにして真宗念仏の道場の開設をみるに至つて、門信徒の喜びのほども察するに余りあるものがある。実に広如上人は函館のみならず、全北海道

の開基上人である。

現在別院保存の檀家過去帳を検するに、本堂落成の安政五年五月より始まり、第二巻に記載する最初の法名は、大黒町石川勘吉伴長吉釈道意である。

四、奥地の開教

本願寺の函館布教開始とともに、函館奉行所の許可を得て、奥地の開教も企てられた。安政五年には小樽群新地の坊舎が出来、一時石狩国札幌群の登塞村にも掛所をこしらえた。この年の十二月には乗経師を中心に本願寺信者の大量入植を企画し、豪商国領兵七の支持を得て、上磯郡清水郷に請地の許可を受けた。この時の請地は五十五万坪と云われ、本山の支援を得て広く但馬、加賀、能登、越前より信者の農民三百七十四人を移住させて開墾に従事せしめ、之ら入植者のために二字の坊舎を健立した。之が後に宣法庵と云い明治に入つて請地還附後は坊舎を江差に移して、後の江差別院の源泉となった。小樽群新地の坊舎が後に移転して今日の小樽別院の濫觴をなし、その掛所が札幌に設けられて、札幌別院の濫觴となるので

あるが、函館は奥地開教の策源地たる立場にあつて、文久年間には長者万部、古平地方にも掛所を設けて教線の拡張に努めた。

函館開教当初における之らの活動は、堀川乗経師の企画又は参画によつておこなわれたものだが、函館にとつて忘れざることのできないのは堀川の開堀である。

五、堀川完成す

堀川乗経師を中心として開掘された人工の堀川は、京都西本願寺前の堀川に因んだ名であるが、二名願乗寺川とも呼ばれ、函館の町の中央を貫通して水路実に二里半、架けられた橋梁八ヶ所、工費七千三百余両を投じた大治水工事である。当時函館近郊の亀田川がしばしば氾濫して、附近の農民が難渋しているのを、この川を堰き止めて水害を防ぐ一方、この水を函館に導入すれば水を得られぬ町の住民も恩恵を受けることを知つた乗経師は、安政六年意を決してこの計画をたて、之が達成のため各方面に奔走したのである。まず檀信徒に謀るとともに本山上申して広如上人の援助を求め、一方官の支持を得

て、治水の専門家の意見も聞き、極力完成に努力した結果、一年足らずで疏水の貫通に成功した。後には舟運にも利用されたというこの川は、赤川の水源から流れる亀田川を分水して、中の橋から高砂通りを流れ、願乗寺前を通つて永国橋の既設の割堀に通ずる人工の長水路であつて、この思いがけない土木工事の成功によつて、水域の民家は良水に恵まれて人の移り住むものも多くなり、新たに東川、西川、蔵前、宝、若松、一本木、海岸町の町が開け、函館の発展を助けた。官民もあげての喜びのほども察しられよう。その賞典として慶応元年五月になつて、墓地のほか二万二千百十八坪の土地を与えられた。

この堀川は明治二十二年に市の上水道ができて、その使命を了えるわけだが、後に函館市は功績を記念して、流域の一部に堀川町の町名を附して、今日に至っている。かかる大事業はもちろん個人の手で出来るものではなく、固より各方面の支援と激励の結晶であるが、乗経師を中心とする初期の門信一同の至情は、よく本利広如上人の期待に背かず、念仏者としての使命を辱めなかつた

ものと云えよう。

函館別院の正門を入って参道の右手、本堂の前に「基の花崗岩の碑がある。之は堀川完成の翌年万延二年に建てられた新渠の碑で、函館史蹟の貴重な文化財である。

六、開教者乗経師

函館開教当初は幕末の風雲急だった最中で、戊辰の戦争を経て明治の太平に至るまでは多事多難の連続だった。元治年間には境内に貧救院を設けて貧窮孤独の者を救済し、戊辰の戦争には傷病兵を本堂に収容救恤した。

開教の道場たる函館掛所は、開創当時は願乗寺の名称を用い、万延元年五月に本願寺掛所と称し、更に明治十年本山は制度を改め官府の許可を得て本願寺函館別院と公称した。北海道における最初の別院であって、乗経師を函館別院知堂に任じた。別院制度の上よりは初代の輪番に当る。かくて乗経師は明治十二年六月二十五日、多端な五十五才の生涯を終えたが、その一生は全く開教に終始したのみならず、開教という特殊な仕事を別にして、開拓者としての

上からみても、その功績は大きい。後に光瑞法主来道の時に、往事をしるんで染筆院号を追贈し、開宗記念には、代香を差遣して、生前の功績を表彰した。また北海道記念式典には伝道第一人者として表彰せられたのも偶然ではないのである。

なお乗経師生誕の青森県川内の願乗寺は後に無住となったので、本山特命任職の任命によって私の父が之を兼務し、父の歿後私が終戦後、後継者ができるまで兼務したのも奇しき因縁である。

七、念仏の流れ

ここで関係の深い乗経師の亡きあとについて記しておかなければならない。乗経師に「女トネと泰栄と道蔵の二男があり、長男泰栄は夭折し、トネ女と異母兄弟の道蔵氏が家を継いだ。道蔵氏は父乗経師の歿後は官より恩賞の土地を基に庶民のために私立の学校を興した。私立堀川尋常高等小学校、堀川商業学校がそれである。再々の火災に遭い苦勞も多かったが、乃祖の衣鉢を継ぐ道心を生涯貫いた。

長女トネ夫人は明治時代日本政府

に招聘聘されて来日した東京帝大教授ジョン・ミルン博士と結婚した。ミルン博士はミルン式地震計を完成した地震学者で、考古学方面でも函館市内の貝塚を発掘し、縄文式文化を学会に発表して斯界に寄与した。この後ミルン博士はトネ夫人と故国英国に引揚げたが、当時中央アジア探険の準備のため渡英した西本願寺法主大谷光瑞上人は、同行のかず子夫人と九条武子夫人をつれてミルン家を訪ね、博士夫妻の歓迎を受けた写真が残っている。光瑞上人は中央アジア仏蹟発掘について博士の意見を求めるための訪問で、明治四十三年のことである。ミルン博士夫妻に子がなく、夫人の令弟道蔵氏の遺児乗道師らを英国へ連れて行って教育するが、博士は、大正二年六十二歳で歿し、トネ夫人は函館に戻り同十四年に歿した。墓は函館台町の西本願寺墓地に入真房大虫師と、堀川乗道師の墓と並んで建てられている。門徒の「倭国一、今村明恒博士らの発起によるものである。後に戦時中来道した光瑞上人がわざわざこの基を訪い往事をしるのび、傍らの乗経師の墓にも展慕している。またミルン博士の血縁

はないが、昭和六十年十月には遠縁に当たる濠州の銀行家タウンホール氏が訪れており、墓は堀川家によって守られている。

なお道藏氏に乘道、経道、信道の三児あり、乗道師は長く教育界にあつたが、晩年は函館西別院副輪番として在職中昭和二十七年十月四日に病歿し、綾子、礼子、和子の三女は教職に、或は良家に嫁して後が榮えている。また経道氏は新聞界に、信道氏は大学教授として、念仏より流れ出でた乗経師門の文化に貢献するところは大きい。

八、主な記録

函館の地形上海風が強いため大火になり易く、そのため函館別院もしばしば災禍に見舞われ、開創当初より明治六年三月二十二日の大火までの十七年間に、回祿にかかること三たびに及んだ。明治九年再建の本堂は同十二年に落成し、十二間に十四間のおおきなもので、開港場として函館の隆昌を反映して、別院もますます榮えた。

明治三十二年九月十五日の大火にまた別院も類焼し、本堂を烏有に帰した

が、対面所、寢殿、庫裡、鐘桜、土蔵は類焼を免れた。ところが同四十年八月二十五日の大火は、羅災家屋九千戸に及び、別院も類焼してすべてを灰燼に帰した。そこで不燃質の本堂再建を計画し、当時の予算十三万八千円をもって煉瓦建築の本堂を実現し、境内に実践裁縫女学校を設立し、大いに教学の伸張をはかった。輪番名和淵海師である。

当時日露戦争後の函館は北洋漁業の基地として、ますます繁榮の地位を確保して行き、大正四年伊藤祐寛輪番の代に、経済的基盤として別院維持財団が設立せられ、同十二年芳滝智導輪番の代に祖師聖人六百五十回大遠忌法要が厳修せられ、空前の盛況であった。同十五年竹中賢恵輪番の代に実践女学校を高等女学校に昇格し、鉄筋の新校舎を建設したが、昭和九年三月二十二日の大火に類焼し、堂宇一切を烏有に帰し、学校も廃校の止むなきに至った。焼け残った校舎を改造して仮本堂を設け、爾後歴代輪番の念願は、本堂再建の使命を果たすことであつたが、間もなく国をあげて戦争の禍中に在つて、一切の計画は中絶の止むなき状態であつた。

九、本堂再々復興、成る

然るに機縁熟して、高倉了要輪番の代に、檀家一同本堂の復興を決議し、昭和二十五年五月二十一日宗祖降誕の佳節に起工式を、同八月二十七日に上棟式を行う運びとなつた。ここで九月十二日には別院門徒中並びに道内有縁の僧侶門徒一同に対し、御門主様の別院復興の御消息が下がり、別に御門主様より復興のため金封を頂いた。

かくて門信徒一丸となつて意復興の懇念に燃えて、遂に十二月二日本堂の工事も完成した。昭和九年の業火に本堂を炎上してより、実に十七年ぶりに新装の本堂の偉観を見ることになつたのである。即ち現在の本堂がそれである。更に同三十一年永江天亮輪番の代に納骨堂を建立した。

なお戦後の都市計画によって別院の境内の前後に緑地地帯が設けられ、このため別院所有地も接収せられたところもあるが、現在別院の境内三千五百坪、境外所有宅地六千七百八十二坪である。その他宮前町、石川町に四千五百坪の別院地を所有する。

◎法要日程◎

蓮如上人五百回遠忌法要 崇敬寺院門信徒物故者追悼法要

日時 5月10日(木)

法要 午後1時より

記念講演 午後2時より

講師 大阪教区 島下組 大光寺
清岡隆文師

蓮如上人五百回遠忌法要 函館別院開基百四十五周年記念法要

日時 5月11日(金)

帰敬式 午前11時より

記念講演 午後12時より

講師 大阪教区 島下組 大光寺
清岡隆文師

御親修

法要 午後1時30分より

御親教 午後2時30分より

(御門主様のおこば)

引き続き 随行長あいさつ

函館別院平面図



別院役職者

門徒総代

松本 演之 (責任役員・本願寺参与)

小原 隆 (責任役員)

森川 基嗣 (本願寺参与)

勝木 俊彰

本間 温子

※別院参与、肝煎、世話係、監査役等の
方々の御芳名を失礼致します。(別紙)

仏教壮年会

○梶原 佑倅 (会長)

東野 保光 (副会長)

小林 忠夫 (副会長)

仏教婦人会

○木村 紀和子 (会長)

岸田 桜子 (副会長)

加賀 起久子 (副会長)

覚信尼会

○見付 由紀子 (会長)

小原 トシ (副会長)

小林 とよ (副会長)

仏教青年会

○小幡 州生 (会長)

野呂 信詞 (副会長)

渡辺 敬史 (副会長)

ボイスカウト

○加賀 康彦 (団委員長)

金子 功 (副団委員長)

別院職員

輪番

鷺山 諦住 (大阪)

副輪番

神田 憲量 (奈良)

脇坂 正淳 (兵庫)

参勤

吉村 教史 (今金)

高倉 健司 (帯広)

承仕

石黒 堅司 (愛知)

毛利 祥真 (島根)

平田 淳真 (富山)

上野 正範 (小樽)

八木 晃紹 (滋賀)

西村 晃寿 (石川)

書記

山崎 三和 (函館)

小池 晴美 (函館)

用務員

岡本 竹俊 (函館)

佐野 洋子 (函館)

嘱託

昆野 智子 (函館)

函館別院歴代輪番譜

(敬称略)

入眞坊大蟲	願乗寺函館休泊所 完成(安政6年没)	安政 4年
初代	堀川乗経(開基) (明治12年没)	
↓	災禍3回(万延1年、明治6年、明治32年)	
名和 淵海	焼失前の煉瓦建築本堂落成 実践裁縫女学校設立	明治40年(1907)
伊藤 祐覚	別院維持財団設立	大正 4年(1915)
芳滝 智導	祖師650回大遠忌法要修行	大正11年
竹中 賢慧	実践高等女学校に	大正15年(1926)
	函館大火、本堂焼失	昭和 9年(1934)
北畠 玄融	龍谷幼稚園創立	
金松 三直		昭和12年(1937)
利国 静恵		
高倉 了要	現在の本堂落成 鐘楼堂完成	昭和25年(1950) 昭和29年
永江 天亮	納骨堂落成	昭和31年(1956)
家郷 隆恵		
仁本 正恵		
藤谷 広隆		
仁本 正恵	親鸞聖人700回大遠忌法要修行(客殿落成)	昭和39年(1964)
後藤 素行	親鸞聖人御誕生800年 公称100年法要修行	昭和52年(1977)
打本 静正	新納骨堂完成 文化会館落成 開基130年法要修行	昭和57年(1982) 昭和59年(1984) 昭和61年(1986)
谷原 博行		
森井 眞教		
越本 愚教	四出張所閉鎖	平成 4年(1992)
樟原 宏朗	龍谷幼稚園学校法人化	
	現台町出張所落成	平成 4年(1992)
佐々木俊朗		
大江 智朗		
鷺山 諦住	新書院・輪番所完成 蓮如上人五百回遠忌修行	平成13年(2001)



●本堂御内陣御修復



●書院内部



●文化会館外部整備



●手洗所修復



●輪番所、書院外形（八角）



●輪番所外形